

二河水源地取水口

1886 年、帝国海軍は呉を将来の主要な海軍駐屯地として指定した。基地の運営には艦船への給水や造船用の水を大量に必要とするため、給水施設の整備が最優先された。帝国海軍は 1888 年に二河水源地取水口の建設に着手し、1 年後に完成した。呉市は、横浜市、函館市に次いで全国で 3 番目に近代的な水道インフラを整備した都市である。二河水源地の水は、浄水場で処理された後、外部からの汚染を防ぐために加圧された鉄パイプを通して運ばれる。

1890 年には宮原浄水場が完成し、二河水源地取水口に接続された。この浄水場では、取水口から採取した水を緩速濾過方式で浄水していた。日露戦争（1904－1905）後に行われた呉海軍工廠の拡張は、更に大量の水道水を必要としたため、海軍は 1918 年に当時呉市から数キロ（6～7 キロ）離れた焼山村及び本庄村にまたがる場所（1956 年に呉市域に編入）に巨大な貯水池を完成させ、宮原浄水場に給水した。新しい海軍水道は呉市に余った水を供給した。呉市に分け与えられた海軍の水道水は、それまで信頼性や衛生面で劣る水源に依存していた呉市の住民を救った。このように、軍事化が近代化の原動力となったことを示している。このような理由から二河水源地取水口は 1998 年に国の登録有形文化財に指定された。

同年、明治天皇（1852～1912）は呉海軍開港記念式典に出席された際に、二河水源地の調査を命じた。評価の結果、他の軍事施設と比較して事業の規模が過大であり、水の供給量は海軍のニーズを十二分に満たすことができると判断された。1918 年に本庄ダムが建設され、海軍はさ

らに給水量を拡大した後、それまで信頼性や衛生面で劣る水源に依存していた呉市の住民と給水を分担するようになった。新海軍の必要性を満たすために、呉市民のためのインフラが整備され、取水口から分水された水は、現在も呉造船所の工業用水として利用されている。このように、二河水源取水口は、軍国化がいかに近代化の原動力となったかを表している。このような理由から、1998 年に国の登録有形文化財に指定された。

二河水源取水口は、水路をまたいだ印象的な花崗岩のアーチで終わっている。アーチの手前の部分は、大きな岩の真ん中に水路を掘って二河川を分流させたものである。この技術と石工は、120 年以上もの間、故障や破損をすることなく存続しており、この取水口を作るために実施された比較的高度な技術と技術の証である。

取水口は、二河川と 2 つの滝（雄滝、雌滝）が浸食してできた二河峡に位置している。1965 年には、取水口の周辺の景観が名勝に指定された。